

タイトル：2011 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2011年11月25日（金）14:30～19:50

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES), 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut
Central District (Downtown Beirut)

Lebanon's image in narratives of pilgrimage in the 17th century

藤井 陽子（実践女子大学および日本大学法学部非常勤講師）

中世期に興隆をきわめたキリスト教の聖地パレスティナをめぐる巡礼は、16世紀の宗教改革とオスマン＝トルコ帝国の勢力拡大による航路の喪失とともに衰退するが、聖地巡礼記の出版は巡礼者の減少に逆比例するように増加していく。本発表では、聖地巡礼記が単なる巡礼の記録や案内書から、読者の信仰心に語りかける「信仰の書」としての性格を強めていく17世紀に、フランシスコ会士によって出版された4作品と、リエージュ出身の無名の司祭が残したマニユスクリから、当時のレバノンに関する記述を紹介した。

レバノン南部の都市スールとサイダは聖地の一部と考えられていたため、巡礼たちは聖書に描かれた過去の繁栄と対比するように、彼らの目前に広がる廃墟と化した町の様子を描写する。ベイルートは完全に破壊され都市としての面影も無く、わずかに聖人とかつて存在した教会の思い出が語られるのみである。また、フランシスコ会士たちは聖地には含まれないトリポリに対しては冷淡であるが、リエージュの司祭は貿易で繁栄する大都市を詳細に描写している。巡礼たちは、聖書に美の象徴として登場するレバノン山とレバノン杉に大きな関心を抱いており、また、ローマ・カトリック教会と良好な関係を保っていたマロン派教会のカノビン修道院では、オスマン＝トルコ帝国の支配下で生きるマロン派教徒に対して非常に好意的な態度を示している。このような巡礼たちの描写には、栄光に満ちた過去のレバノンと、異教徒に支配され過去の栄光を失った17世紀のレバノンに関する二重のイメージが見て取れる。

コメンテーターのRay Mouawad氏（Lebanese American University）は、巡礼たちの個人的な情報や、17世紀当時のレバノンに関する歴史的情報を加味するようにとアドヴァイスしてくださった。さらに、なぜフランシスコ会士の巡礼記を選んだのか、フランシスコ会士と聖地巡礼との関わりについても説明を加えるようにとご教示いただき、今後の課題が明確になった。

他の発表者の方々とそれぞれの専門分野について語り合えたことも大きな収穫であった。また、発表会の余暇を利用してベイルート市内やサイダなどを訪問することで、巡礼たちの残した描写と現在の姿を比較することができ深い感銘を受けた。このような貴重な体験をさせてくださった黒木先生を始めアジア・アフリカ研究所の諸先生方、関係者のみなさまには改めて深く御礼申し上げます。今後ともこの報告会が数多くの若い研究者に貴重な経験の場を与えていくことを切に希望しています。